立間祥介訳

三国志

平凡社

立間祥介訳

三国志

五

平凡社

訳者紹介

立間祥介　1928年東京生。善隣外事専門学校卒。専攻　中国文学。慶応義塾大学教授。主訳書『従文自伝』（河出書房）『中国講談選』『呼蘭河の物語』『児女英雄伝』『今古奇観』（共訳）（平凡社）『駱駝祥子』（岩波書店）

三国志　コンパクト版　第五巻

発行日　一九八九年二月二〇日　初版第一刷

定価　一〇〇〇円

訳者　立間祥介（たつま・しょうすけ）
発行者　下中　弘
発行所　株式会社　平凡社
〒一〇二　東京都千代田区三番町五
電話・東京（〇三）二六一―一七六五（編集）
（〇三）二六五―〇四五五（営業）
振替・東京八―二九六三九
印刷　東洋印刷株式会社
製本　和田製本工業株式会社

落丁・乱丁本は小社サービス係でお取替えいたします（送料小社負担）

ISBN4-582-32515-7

三国志主要人名表

配列は国別の五十音順。

[魏]

鍾会（三二五―二六四）字は士季。智謀にたけ、鄧艾の好敵手。鄧艾とあらそって蜀にはいり、鄧艾を追って蜀を握るや謀反を企んで殺される。

徐晃（？―二三七）字は公明。強力無双。はじめ楊奉に仕え、曹操の部将となって偃城で関羽を大破する。

曹叡（二四六―二三九）字は景昭（『演義』では景召）。魏の元帝。曹操の孫。晋の武帝司馬炎に皇統を譲り、陳留王に封じられる。

曹植（一九二―二三二）字は子建。曹操の第三子。詩人として有名。晩年、陳国に封じられ、思と諡されたので陳思王と呼ばれる。

曹真（？―二三〇）字は子丹。曹操の甥。武将として曹操・丕・叡の三代に仕えた元老。大司馬として蜀平定を計画したが、陳倉道出陣で失敗し病を得て死ぬ。

曹操（一五五―二二〇）字は孟徳。幼名阿瞞。権謀術数にたけた英雄で、文学にも深い理解をもつ。後漢献帝を擁して中原を統一し魏王となる。

曹爽（？―二四九）字は昭伯。曹真の長子。曹叡に仕えて軍政の大権を握るが、司馬懿と対立し斬られる。

曹丕（一八七―二二六）字は子桓。魏の文帝。曹操の長子。文武両道にたけ、特に弟の曹植と並んで建安文学の代表的存在として名高い。献帝を廃して魏を建てる。

曹髦（二四一―二六〇）字は彦士。曹丕の孫。高貴郷公より司馬師に迎えられて帝位につく。のち司馬昭の専横を怒り、みずから昭を討とうとして殺される。

張郃（？―二三一）字は儁乂。韓馥・袁紹に仕えたのち、官渡で曹操の配下となる。智謀にたけた武将で、街亭で馬謖を破る。

張遼（一六九―二二二）字は文遠。もと呂布に仕えた曹操の部将。情義に厚く、合肥の役で、歩卒八百をもって十万の呉軍を破り江東に勇名をとどろかす。

鄧艾（？―二六四）字は士載。智略抜群の武将。奇兵をもって成都を衝き劉禅を降伏させたが、鍾会に讒

言されて斬られる。

[蜀]

関羽（？―二一九）字は雲長。蜀の五虎将の一。劉備の義弟で文武両全の名将。劉備の入蜀後、荊州を固めていたが、呉と事をかまえて麦城で敗死する。のちかずかずの霊験をあらわす。

姜維（二〇三―二六四）字は伯約。はじめ魏に仕え、天水で諸葛亮に降る。諸葛亮に兵法を譲られ、亮の死後、蜀の軍師として活躍する。

黄忠（一四八―二二三）字は漢升。蜀の五虎将の一。弓の名手。老いてなお定軍山で魏の夏侯淵を斬り勇名をあげる。

諸葛瞻（二三七―二六三）字は思遠。諸葛亮の子。鄧艾を綿竹に迎撃して戦死する。

諸葛亮（一八一―二三四）字は孔明。別名臥竜。劉備なきのち、蜀の運命を双肩に荷って粉骨砕身、五丈原で陣没する不世出の大軍師。

趙雲（？―二二九）字は子竜。蜀の五虎将の一。槍の名手で沈着勇敢。劉・関・張なきのちも諸葛亮を助けて活躍する。

張飛（？―二二一）字は翼徳。蜀の五虎将の一。劉備・関羽の義弟。三国屈指の豪傑だが、生来の短気がわざわいして部下に寝首をかかれる。

馬超（一七六―二二三）字は孟起。蜀の五虎将の一。葭萌関で曹操を危地に追いつめた勇将。

龐統（一七八―二一三）字は士元。別名鳳雛。諸葛亮と並び称される知恵者。軍師として劉備の入蜀に随行し、落鳳坡で戦死する。

劉禅（二〇七―二七一）字は公嗣。幼名阿斗。劉備の長子。劉備が蜀の先主と呼ばれるのに対し、後主と呼ばれる。魏に降伏したのち安楽公に封じられる。

劉備（一六一―二二三）字は玄徳。蜀の昭烈帝。曹丕が魏を建てるや、成都で蜀を建てるが、呉平定を志して陸遜に大敗し、白帝城で死ぬ。

[呉]

甘寧（？―二二一）字は興覇。長江の盗賊出身の孫権の部将。濡須の合戦で、わずか百騎をひきいて曹操の本陣に突入し、威名をあげる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

孫休（三三五―二六四）字は子烈。孫権の第六子。瑯琊王から孫綝に迎えられて帝位につき、綝を殺して皇室の威信を回復する。

孫権（一八二―二三二）字は仲謀。呉の大帝。父兄（孫堅・孫策）の業をついで江東に人材を集め、魏・蜀につづいて呉を建てる。

孫皓（二四二―二八三）字は元宗。孫権の孫。凶暴で酒色を好み、無道の所行多く亡国を招く。晋に降って帰命侯に封じられる。

孫綝（三三一―三五八）字は子通。孫静（孫権の叔父）の曾孫。孫亮・孫休を迎立して専横をきわめ、孫休に殺される。

孫亮（二四三―二六〇）字は子明。孫権の末子。十歳で帝位についたが、十六歳のとき孫綝に廃されて会稽王に降される。

丁奉（？）字は承淵。孫権・亮・休・皓の四帝に仕えた名将。孫皓擁立の功労者。

陸遜（一八三―二四五）字は伯言。猇亭で劉備を大破した智将。のち丞相となるが、孫権が末子亮を太子に立てようとしたのを諫め、いれられずに憤死する。

呂蒙（一七八―二一九）字は子明。孫権に仕えた文武両全の名将。関羽を破って大功を立てるが急病で死ぬ。

［晋］

司馬懿（一七九―二五一）字は仲達。権謀術数にたけ、諸葛亮の好敵手としてしばしば亮と対峙し、ついにその中原進出の企図を挫折させる。斉王曹芳のとき曹爽を殺して丞相となり、魏の大権をにぎる。

司馬炎（三三六―二九〇）字は安世。晋の武帝。司馬昭の長子。魏の元帝曹奐を廃して晋を建て、呉を亡ぼして天下を統一する。

司馬師（二〇八―二五五）字は子元。司馬懿の長子。兵書に通暁し、司馬懿なきのち魏の政権を握り、曹芳を廃するなど専横をきわめる。

司馬昭（二一一―二六五）字は子尚。司馬懿の次子。兵法にたけ、兄の師のあとをついで魏の大将軍・晋公となり、蜀平定ののち晋王に封じられる。

杜預（二二二―二八四）字は元凱。博学多才、兵法にたけ、鎮南大将軍として呉の平定にあたる。『春秋左氏経伝集解』ほかの著書がある。

羊祜（三三―二七八）字は叔子。寛容で小事にこだわらず、曹操のとき、荊州の都督となって人心をつかむ。晋に仕えて征南大将軍となる。

目次

第六十九回 ―――― 3
周易を卜して　管輅　機を知り
漢賊を討たんとして　五臣　節に死す

第七十回 ―――― 23
猛き張飛　智をもって瓦口の隘を取り
老いし黄忠　計をもって天蕩山を奪う

第七十一回 ―――― 42
対山を占めて　黄忠　逸をもって労を待ち
漢水に拠りて　趙雲　寡をもって衆に勝つ

第七十二回 ―――― 64
諸葛亮　智をもって漢中を取り
曹阿瞞　兵を斜谷に退く

第七十三回 ―――― 82
玄徳　漢中王の位に進み
雲長　襄陽郡を攻め抜く

第七十四回 ―――― 102
龐令明　櫬を撞いて死戦を決し
関雲長　水を放ちて七軍を滸らす

第七十五回 ―――― 121
関雲長　骨を刮って毒を療し
呂子明　白衣にて江を渡る

第七十六回 ―――― 138
徐公明　大いに沔水に戦い
関雲長　敗れて麦城に走る

第七十七回 ―――― 157
玉泉山に　関公　霊を顕し
洛陽城に　曹操　神に感ず

第七十八回 ―――― 176
風疾を治さんとして　神医　身死り
遺命を伝えて　奸雄　数を終える

第七十九回 194
兄弟に逼って　曹植　詩を賦し
甥叔を陥れて　劉封　法に伏す

第八十回 212
曹丕　帝を廃して炎劉を簒い
漢王　位を正して大統を続ぐ

第八十一回 231
兄の讎うちに急りて　張飛　害に遇い
弟の恨みを雪がんとして　先主　兵を興す

第八十二回 248
孫権　魏に降って九錫を受け
先主　呉を征して六軍を賞す

第八十三回 266
猇亭に戦って　先主　讐人を得
江口を守って　書生　大将を拝す

第八十四回 289
陸遜　営　七百里を焼き
孔明　巧みに八陣図を布く

第八十五回 310
劉先主　詔を遺して孤児を託し
諸葛亮　安居して五路を平らぐ

主要人名表 前付

地図 333

三国年代対照表 334

三国志 五

羅貫中作
立間祥介訳

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

第六十九回

周易を卜して　管輅　機を知り
漢賊を討たんとして　五臣　節に死す

さてその日、曹操はまっ黒な風の中から屍たちが立ちあがったのを見て、その場に昏倒したが、風はたちまちおさまり、屍はかき消えたように見えなくなった。左右の者が曹操を助けて王宮に帰ったが、彼は驚きのあまりそのまま病いの床についた。後の人が左慈をたたえた詩に、

飛歩　雲を凌りて　九州に遍く
独り遁甲に憑りて　自ら遨遊す
等閑に　神仙の術を施設し
曹瞞を点悟せんとすれど　転頭せず

曹操は病いに倒れた後、薬をのんでもいっこうにそのきき目がなかった。かかるときに、太史の丞（太史令の属官）許芝が、許昌より伺候したので、曹操が易を卜させたところ、彼が言うの

に、

「大王には、管輅という卜いの名手のことをお聞きおよびにはござりませぬか」

「おお、それならかねてより耳にしておるが、実のところはよう知らぬ。詳しく申してみよ」

曹操に尋ねられて、許芝は語り出した。

管輅は字を公明といい、平原の人である。容貌は醜く、酒を好み奇行が多い。父親はかつて瑯琊郡即丘の県長をつとめたことがある。管輅は幼少より星を眺めるのを好み、夜も眠らぬことがあって、両親もそれを止めることができなかった。常々、「鶏や鵠すら時を知っているのに、人間でありながらそれを知らずにおれようか」と言い、近隣の子供たちと遊ぶときにも、地面に天象の図を描き、日月星辰を描きいれた。やや長ずるにおよんでは、『周易』（易経）に通暁し、よく風角（風向きによって吉凶を占う術）を見、人の寿命をあてることは神のごとく、さらに人相の術にも長けるに至った。瑯琊の太守単子春がその名声を聞いて召し出だしたことがある。このとき、単子春はいずれ劣らぬ能弁の士百余人を左右にはべらせていたが、管輅は恐れる色もなく言った。

「わたくしは年がゆかず、胆力もまだできておりませぬゆえ、まず美酒を三杯ほどご馳走いただきとう存じます。ちょうだいいたしたうえで、お話しいたします」

単子春はおもしろいことを言う奴と、三杯の酒を与えた。飲み終わって彼は言った。

「これよりわたくしの相手をなされるのは、府君（太守の尊称）のお傍に控えておいでの方々に

ございますか」

「いや、わしが相手しようぞ」

と、これより単子春は彼と『易』の理論を語り合ったが、そのとうとうたる弁舌は、いちいち深奥にふれ、子春がつぎつぎに論難するのに、立板に水と答えて、朝から日の暮れるまで、ついに酒食の暇もなかった。子春をはじめ幕僚一同はただただ感服し、以来、天下に「神童」の名をうたわれるようになった。後に、その地の郭恩という者、兄弟三人がともに跛となり、彼を招いて占いを頼んだことがある。すると彼が言った。

「卦によれば、お宅の墓に女の亡魂がある。あなたの伯母か叔母にあたるはず。前に飢饉があったとき、数升の米をうかそうとして、その者を井戸に突き落とし、大きな石で頭をくだいたことがあるでございましょう。その者の亡魂が苦しんで、天に訴えたがため、あなた方兄弟に報いが現われたもので、祓うことはできませぬ」

郭恩らは泣いてその罪を認めたという。

安平の太守王基は、彼の盛名を聞き伝えて、館に招いた。たまたま（同郡の）信都の県令の妻が、日ごろから頭痛に悩み、子が胸痛に悩んでいたので、彼を招いて占ってもらったところ、

「この建物の西の隅に二つの屍がございます。一人の男は矛を持ち、もう一人の男は弓矢を持って、頭を壁の中にいれ、足を外に出しております。この矛を持った者が頭を刺すゆえ、頭痛が起こり、弓矢を持った者が胸や腹を刺しているゆえ、胸が痛むのでございます」

と言うので、掘らせてみると、八尺掘り下げたところから、はたして二つの棺が現われた。一つの棺には矛があり、一つの棺には角弓（獣の角で飾った弓）と矢がはいっていて、木はすべて腐っていた。管輅はその骨を城外十里のところに移させたが、妻と子の病気はぴたりとおさまった。

館陶の県令諸葛原が新興の太守となって赴任することとなり、管輅が挨拶にいったときのこと、幕僚の一人が、彼が透視をよくする旨を言上した。諸葛原はそれを信ぜず、ひそかに燕の卵・蜂の巣・蜘蛛の三品を、三つの箱の中にいれ、彼に占わせてみた。卦が出るや、彼はそれぞれの箱の上に四句の言葉を書いたが、第一の箱には、「気を含みて変を須ち、宇堂に依る。雌雄の形を以て、羽翼を舒べ張る。これ燕の卵なり」とあり、第二の箱には、「家室さかしまに懸りて、門戸衆多し。精を蔵し毒を育みて、秋を得てすなわち化す。これ蜂の巣なり」とあり、第三の箱には、「長き足を轂觫わせ、糸を吐きて羅をなす。網を尋ねて食を求むに、利は昏き夜にあり。これ蜘蛛なり」とあったので、一座の者は驚嘆したという。

また、土地の老女が牛を失い、彼に占いを頼んだことがある。彼は、

「北の谷間の水辺で七人の者がつぶしている。急いで尋ねあてれば、皮も肉もある」と判じた。老女がさがしにいったところ、言にたがわず七人の男が茅屋の裏で料理しており、皮も肉もそっくり残っていた。老女の訴えでその郡の太守劉邠が彼らを捕えたが、そのあと、「お前はどうしてこれを知ったのか」と老女に尋ね、老女は管輅の神のような占いを申し立てた。劉邠はそれを

信じかね、管輅を館に招くと、印嚢と山鳥の羽毛を箱の中にかくしておいて占わせた。すると彼が、一つは、「内は方形、外は円形、五色文を成す。宝を含み信を守り、出だせば則ち章あり。これ印嚢なり」、一つは、「巌に鳥あり、錦の体、朱の衣。羽翼は玄と黄、鳴きて晨を失わず。これ山鳥の羽毛なり」と占ったので、大いに驚き、賓客として館に留めた。

ある日、城外に散策に出た彼は、一人の若者が田を耕しているのを見かけ、しばし道端にたたずんで、じっと見つめていたが、ややあって尋ねた。

「お前はなんという姓で、今年、いくつになるか」

「姓は趙、名は顔といい、十九歳になります。先生はどなたさまにござりますか」

「わしは管輅という者だが、お前の眉間には死気が現われているゆえ、三日のうちに必ず死ぬであろう。なかなかよい顔立ちをしておるのに、気の毒なことだ」

趙顔は家に馳せもどって、この由を父親に告げた。父親はこれを聞いて管輅に追いすがり、地面に泣き伏して頼んだ。

「なにとぞ息子の命をお助け下されませ」

「これは天命だから、どうすることもできぬ」

「わたくしめは、この年になるまで、子供としてはこの子しかおりませぬ。なにとぞ、なにとぞお助け下されませ」

趙顔も泣き泣き頼んだ。管輅は親子の切なる頼みに、趙顔に言った。

「お前はよくすました酒一甕と、鹿の脯（乾肉）一片を持って、明日、南の山の大木の下にゆくがよい。そこの大きな平らな石の上で二人の人が碁をうっておる。一人は南向きに坐り、白い袍を着ており、大変に醜い。一人は北向きに坐り、赤い袍を着ており、大変に美しい。お前は、その二人が碁に夢中になるときを見はからい、酒と脯を手もとに差し出すのだ。すっかり飲み食いしてしまったら、寿命を延ばしてくれるようよくよく頼みこむとよい。必ず延ばしてもらえるであろう。だが、きっとわしが教えたとは申すではないぞ」

老人は彼を家に引き留めた。あくる日、趙顔は酒と脯、杯や皿をたずさえて南の山に登った。およそ五、六里もゆくと、はたして二人の人が大きな松の木の下の平らな石の上で碁をうっていて、彼が近づいても見向きもしない。趙顔がひざまずいて酒と脯をすすめると、二人は碁に気を取られて、知らぬ間に酒を飲み尽くしてしまった。趙顔が地面に泣き伏して延命を頼むと、二人はいたく驚いた。

「さては管子（管輅）が言ったのだな。ともあれ、わしたちは賄賂を受けてしまったのじゃから、何とかしてやらねばなるまいて」

と赤い袍の人が言った。白い袍の人が手もとから帳簿をとりあげて繰っていたが、趙顔に言った。

「お前は、今年十九歳で、死ぬことになっておる。わしが『十』の上に『九』という字を書きそえてやるから、お前の寿命は九十九までと心得よ。帰って管輅に会ったらよう申しておけ。二度

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com